

写真 × 土木 = “ドボク” の魅力の発信

[WEB取材] 大山 顕氏 (写真家)

連載「かける土木」では、他分野からみた土木に焦点を当て、他分野と土木が掛け合わさることでのどのような可能性が生まれるのかを、その分野の専門家のインタビュを通じてお伝えしていきます。第9回となる今回は、写真家の大山顕様にお話を伺いました。

——現在の活動に至るまでの経緯や土木と関わりを持ったきっかけについて教えてください。

大学では工学部内にあるデザイン系の学科に所属していました。環境デザインの研究室で、都市の再開発を行う際にどのように調査をして、プランニングやコンセプトを構築するのかわり、都市デザインに関することを学びました。中でも、東京都にあった錦糸町の工場跡地が再開発されることになった際に、自分たちならどのようなプランニングを行うかという課題が出され、その課題に向けて現地調査に取り組んだことが、印象に残っています。課題に取り組む際に現地を歩き回り、錦糸町がどのような街でありどのような魅力があるのかを発見しました。そしてそれらを写真に収めることが面白いと感じました。今思えば、このことが写真家になろうと思った最初のきっかけでした。

また、誰も目を付けていないようなものを見つけて撮影するのが楽しいと感じました。そして、工場のような魅力的であると理解を得られにくいものでも、何かしらの魅力を発見し、写真を撮影しました。撮影した工場の写真は、先生や周りの学生から面白いという評価をもらえました。そのようなこともあり、工場をはじめとして、魅力がないと言われる避けられがちな土木構造物の写真を撮影する面白さに気付きました。大学卒業後は、電器メーカーに就職しましたが写真の撮影も継続していました。そのような生活約10年続けていた頃、工場の写真集の出版やテレビ出演の依頼があり



写真1 工場の写真 (撮影：大山顕氏)

ました。そして、「大山顕」の個人の名のもとに依頼をもらえることは得難い機会だと思ひ、当時働いていた会社を辞め、写真家として活動するようになり現在に至ります。

——写真家としての活動の中で、特に土木と関わる場面を教えてください。

最初は、「土木」ではなくカタカナ表記の「ドボク」の写真を中心に撮影していました。「ドボク」とは、橋梁やダムのようないわゆる「土木」構造物ではないけれど、土木らしさが感じられるような曖昧なものを言い、団地がその例です。団地は建築ですが、都道府県や公団が主体となって造られるため、社会資本でもあると思います。同様に、工場も「土木」ではないけれど土木らしさが感じられます。2007年には工場の写真集である『工場萌え』を出版するなど、私はそのような「ドボク」の写真を撮影してきました。



写真2 立体交差の写真 (撮影：大山顕氏)

これまでさまざまな写真を撮影してきましたが、中でも2019年2月に出版した『立体交差』の写真集は反響が大きく、土木学会出版文化賞を受賞しました。その際、写真集の最終ページに記載した「立体交差論」の文章が特に好評でした。土木構造物の魅力が、写真によって表現されるだけでなく、論じられることも求められているのだと感じました。

——写真と土木を掛け合わせることで期待していることは何でしょうか。

景観を阻害すると言われがちな土木構造物ですが、私はそこに秘めた魅力を発見して写真を用いて世の中に発信してきました。しかし、例えば電柱なら電柱メーカーの人、ダムならダムの施工者など、そのドボクのプロの方、つまりそのドボクの「中の人」が、それぞれ魅力を発信した方が面白いと徐々に感じるよう

になりました。現代はSNSなどが普及し、誰でも簡単に写真などの情報を発信できる時代です。これからは、今までのようにプロではない人が土木を観察することの素晴らしさを語るのではなく、「中の人」が、その人の視点から魅力を発信していく時代になることを期待しています。例えば、建築物は設計者の名前が大々的に公開されるのに対して、土木構造物は誰が設計したのか全く知られていない場合がほとんどです。土木も建築のように、「中の人」たち自身で魅力を発信することで、「中の人」の存在感が増していくことを期待しています。

——写真家としての活動の今後の展望は何でしょうか。

2007年に出版した写真集『工場萌え』は好評でしたが、工場の夜景が被写体として美しいという認識だけが広がってしまいました。つまり、表層的な外観の魅力だけが伝わってしまったのです。これは私が本来発信したかったことではありませんでした。この本がもつぱら見た目の美しさを伝えていたことが招いた結果だと反省しました。工場が持っている機能や歴史なども魅力として語ることが

必要なだと今は思っています。とはいえ、当時そのような説明を長々としていたら、ここまでブームにはならなかったでしょう。そのような経験があるので、現在は前述の『立体交差』のように、写真とともに文章でも構造物の魅力を表現するようにしています。将来的には論文の文献に引用できるような論述を世に出し、土木の景観論の中に位置付けられるようになれば良いなと思っています。

お話を伺って

土木を専門とする人以外の多くは、土木というと景観的に悪いイメージが浮かぶと思います。そのような中で、土木を専門とする私たち「中の人」たち自身が、土木の魅力を伝えていくことは大切であることに、お話を伺って気づきました。そしてその際に、外観が美しいという単なる「映え」ではなく、本質的な魅力を発信していきたいと思いました。

(担当編集委員：田中万琳、池谷風馬、浅野太我)